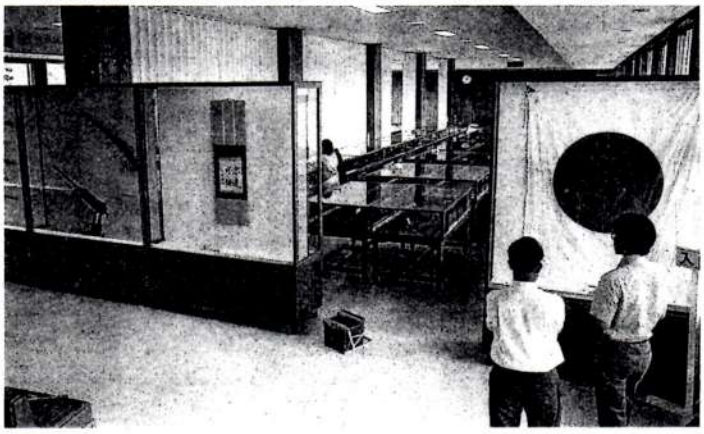
文化

沈黙に向き合う
沖縄戦 聞き取り47年 〈20〉

石原 昌家

県立平和祈念資料館
正面に日の丸と銃器
にじむ皇軍賛美に批判

開館を翌日に控えた県立平和祈念資料館。正面に大きな日の丸の寄せ書きが展示されている（1975年6月撮影）



1975年6月11日、沖縄県立平和祈念資料館が開館した。多くの県民にとっては、突如、摩文仁平和公園に2階建ての建物が立ったという印象だった。それは、翌7月20日、日本復帰記念事業として沖縄国際海洋博覧会が開幕する1カ月ほど前のことであった。

開幕式には、皇太子夫妻が参列する予定だった。その前に夫妻は沖縄戦の象徴的存在になっていた「ひめゆりの塔」を参拝することになっていた。当時、その付近には、皇太子夫妻が「休憩」できるような建物はなかった。それで皇太子夫妻の南部戦跡訪問に間に合わせて、日本政府が急きょ、「休憩所」としての建物を建てたのだろう、と噂されていた。

開館

『琉球新報』の6月10日（朝刊）には、「戦争の悲惨後世に／平和祈念資料館あすオープン」という見出しの記事が紹介されている。新聞の写真で一目瞭然だが、まず目につくのは、正面に飾られた大きな日の丸の寄せ書きである。そして左手には銃器類が麗々しく飾られている。いまにも実弾発射されるような銃もあると、銃に詳しい人は心配していた。

『沖縄県史』の沖縄戦記録Ⅰ、Ⅱ、『那覇市史』戦時記録が発刊され、住民の悲惨な体験が、県民の間に共有されはじめているときだった。

革新県政屋良朝苗知事のもとでこのような靖国神社の戦争資料館（遊就館）、「陸軍記念館」と見まがうような「資料館」が開館されるとは、いったい何事だという批判がたちまち渦巻いたことはいうまでもない。

意見書

その後の経緯については、99年8月から10月にかけての「資料館改ざん事件」の詳細をまとめた『争点・沖縄戦の記憶』（石原昌家・大城将保・保坂廣志・松永勝利著、社会評論社、2002年3月）の「沖縄戦はどう展示されたか」（大城将保）が詳しい。

『沖縄県史』や『那覇市史』の執筆・編集に携わってきている研究者グループが、これまでの調査記録に照らして、展示の仕方にショックを受けた。自らの聞き取り内容とは正反対の皇軍賛美ともいえる内容だったからである。そこで「沖縄戦を考える会」の「準備会」が中心になって、県知事、県議会議長に展示改善を要望した「意見書」を提出することになった。それは75年6月20日だった（大城将保氏記録）ので、開館9日目という素早い動きは危機感の現れだったといえる。その問題点を次のようにまとめている。

『（1）展示資料のほとんどが旧日本軍の銃砲器、戦闘用具、軍人精神を示す遺品類にかぎられ、全体の演出の観点・方法も旧日本軍を記念し顕彰する傾向をもっている。（2）それに比べて沖縄県民の戦争体験を物語る遺品、資料、解説などはほとんどない。つまり軍人本位・作戦中心の展示になっていて、県民の立場に立った観点を欠き、県民不在の資料展示になっている。…（中略）軍国主義復活の逆流が年々強まり、戦争体験の空洞化が意図的に進められ、靖国思想の復権が画策されている今日の時代背景を考えれば、現在の資料館はまさに靖国神社の沖縄版といった役割を果たし、県民感情と反戦平和の理念に対立する危険なものとなるおそれがある』（前掲書、54ページ）

展示計画委員会

この「意見書」を受けた沖縄教職員会の会長だった屋良朝苗知事は、聞く耳をもっていた。すぐに、「学識経験者」からの意見聴取をして、開館したばかりの展示内容を全面的に改めることになった。

76年3月には「資料館運営協議会」が設置され、資料館の「設立基本理念」が採択された。そして「基本理念の答申と同時に、協議会の下に展示計画に関する専門委員会がおかれ、さらに具体的な展示作業にたずさわる総合プロデューサーのもとに展示演出委員会が設置された」「そこで、運営協議会の会長である中山良彦氏（元海洋博沖縄館副館長）が展示計画委員会の委員長も兼務し、また展示演出委員会においては総合プロデューサーの業務を委託されて展示作業の指揮をとった。つまり、基本構想から展示にいたるまでの全工程に責任をもつ総合プロデューサー方式をとった。彼のもとに沖縄戦考える会の主要メンバーが専門委員会に結集して同志的結合のつよい実行グループが編成され、県援護課の職員とも一体となってこれをサポートした」（前掲書、55ページ）。

私は、77年から始動した「展示計画委員会」の段階から資料館創りに加わることになった。総合プロデューサーの中山良彦さんには、この段階で初めて知己を得た。以後、「意気投合」した中山さん宅を出入りするようになり、資料館建設以外の分野で中山さん自身から戦中、戦後体験を聞き取りすることになった。私だけが知っている寺島尚彦作詩作曲の「さとうきび畑」（ざわわのリフレインではじまる名曲）誕生秘話も中山さんから戦後体験を聞き取りすることによって生まれたものである。

私はそれ以後、沖縄県立平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館、八重山平和祈念館（戦争マラリア資料館）、新沖縄県平和祈念資料館、対馬丸記念館などの理念・構想創りにかかわることになった。それはすべてほう大な戦争体験の聞き取り調査をふまえたものであった。

77年5月12日に「準備会」を経て「沖縄戦を考える会」が創設された。池宮城秀意氏を会長にすえたが、実質的には沖縄海洋博沖縄館副館長を経た中山良彦さんが会長的存在で、事務局長は大城将保さんという陣容だった。

（次回は7月中旬掲載）